

明清交替期の東アジア海域と華人海商：『華夷変態』を中心として

郭, 陽

<https://doi.org/10.15017/1485055>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

郭 陽（東洋史学）

明清交替期の東アジア海域と華人海商

——『華夷変態』を中心として——

論文審査の結果の要旨

本論文は、長崎に来航した華人海商から聴取した「唐船風説書」を集成した、『華夷変態』を中心に、漢籍史料も併用して、明清交替の最終局面における東アジア海域の変動を、華人海商の視点を通じて検討したものである。

まず第一章・第二章では、『華夷変態』の研究史を、網羅的・通時的に整理・紹介する。第一章では幕末から現在にいたる日本における論考を、第二章では戦前から現在にいたる台湾・中国における論考を通観し、従来研究成果を総括して課題を提示した。

つづく第三章・第四章では、三藩の乱の時期に呼応して大陸に進攻した台湾鄭氏勢力の動向を、『華夷変態』と漢籍史料を照合して検討する。『華夷変態』には、鄭氏の大陸進攻の経緯をめぐって、漢籍史料にはない多くの情報が記されている。ただしそこには、各海商の背後にある軍事勢力の正当性や優位性を強調するバイアスも認められるという。

ついで第五章では、海商たちによる情報収集のプロセスについて分析する。彼らは出航地における街談巷説や、他地域からの伝聞、乗組員や沿海民から得た情報などにより、広範な地域の戦況を供述していた。また第六章では、清朝が最終的に鄭氏を制圧する前後の戦況や、台湾社会の混乱を、台湾から来航した海商たちの供述を通じて検証する。

さらに第七章では、鄭氏の降伏後、江戸幕府が発した「貞享令」をめぐる華人海商の対応を考察する。海商たちは貿易制限の緩和をくりかえし嘆願し、東南アジアから来航する華人商船も、清朝支配下の商船との差別化を求めた。幕府は彼らの請願を認めなかったがその後も多くの商船が長崎に来航し続けたという。最後に第八章では、明治期の留日中国人学生が、『華夷変態』の漢文抜粋本を東京で刊行したことに注目し、清朝支配への批判や民族革命の鼓舞を目的として、記事の再編集がおこなわれていたことを明らかにした。

『華夷変態』を用いた国内外の研究はきわめて多いが、日本史研究者は漢籍史料を十分に利用するにいたらず、東洋史・中国人研究者は、同書の大部分を占める候文の読解に限界があった。これに対し、本論文では候文による風説書を十分に活用するとともに、官撰・私撰の漢籍史料も広範に参照し、明清交替の最終局面を多角的に再検討し、多くの新たな知見を提示するとともに、情報収集のプロセスやそのバイアスなども明らかにしており、『華夷変態』研究に新局面を開いた業績として評価しうる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つ者であると認める。